

神戸で「県農地中間管理事業推進シンポ」

大切な農地つなぎ

将来の農家を育てるため、幼稚園児から大学生まで、農業体験や食育指導を行っている(夢前夢工房)



農地中間管理事業とは

農地中間管理事業は農地を貸したい人(出し手)から「農地中間管理機構」が農地を借り受け、規模を拡大したい担い手や新規就農者など(受け手)に貸し付ける事業。各都道府県に一つずつ農地中間管理機構が指定されており、兵庫県では兵庫みどり公社がなっている。

農業従事者の高齢化が進み、農地として使われなまま保有する耕作放棄地が増えている。一方で、農業への関心が高まり、農地を確保したいと考える法人

兵庫県は、規模縮小したい農家などから農地を集め、新規就農者や規模拡大を図る農家、農業法人につなぐ「農地中間管理事業」を昨年4月にスタートさせた。兵庫みどり公社が農地中間管理機構になり、今年6月までに約1200畝を担い手に貸し付けできる見込みだ。農地を未来につなげる方策をとともに考える「兵庫県農地中間管理事業推進シンポジウム」がこのほど、神戸市内で開かれ、環太平洋連携協定(TPP)や6次産業化、地産地消といったキーワードで語られる農業の現状や、地域農業の活性化などについて関係者らが語り合った。

国の発表によると、国内の耕作放棄地は40万畝あるといわれている。農地全体の約1割に当たる数字だ。これは農家からの回答を基にした数字で、実態調査を基にした総務省農地面積は27万畝、このうち農地に戻るだろうと考えられる面積は14万畝になる。つまり、耕作放棄をきちんと解消して農業生産ができる農地面積は14万畝だということだ。

農地中間管理事業はこれらの耕作放棄地を解消し、農業の担い手に農地を集積・集約させ、コスト削減し、農業としての競争力を高め、農家の所得を増やそうという狙いで始められた制度だ。

地域の農業社会は4重の構造になっている。「企業の農業経営」が真ん中に存在し、そ

借り受けた農地を集約し貸し付け

力金を得られるメリットもある。一方の「受け手」は、機構から農地をまとめた形で10年間にわたって借りることができる。これによって、小規模に分散されていた農地がやる気のある農家に渡ることになり、地域農業の発展にもつながる。

兵庫県では全国でも有数の推進体制で事業の周知徹底にも力を入れている。機構の三浦恒夫副理事長は「出し手の方も受け手の方も、まずは安心して相談しに来てください。機構と一緒に地域の農業、地域の将来を考えます」と呼び掛けている。

農地中間管理事業の仕組み



分散した農地を借り受け、担い手ごとに集約して貸し付けます

基調講演 「日本農業の現状と将来展望」

全国農地保有合理化協会会長

渡辺 好明氏



地域に誇りを持って活性化を

れを取り巻くように生きがいが、趣味、兼業で農業をしている「市民農家」、土地は持っているが採れそうなのを採る「非農家」、そしてその外側に農村に興味を持って訪ねる「都会からの訪問者」に滞在してもらう設計図ではない。失業者が多い。地域所得の増加につながる。誇りがなくなればサービスに乘せていく

自分たちがその地域の発想が重要だ。ことを「だめだ」「先がない」と思いこんでいては地域の発展はない。日本の農水産物の輸入・生産額は約1兆円だが食料品最終消費支出でみると74兆円になる。この出口を上げ、100兆円を超える世

界にしていかなければならない。三つ目は「誇りを持とう」。具原俊民は「米をはじめ、農産物の価格は低くない」と思っているが、1日にどれだけの労働に従事しているかを換算してみてもいい。都会の労働者並みに1年に1800、2000時間働いて出でみると74兆円になるか、完全に燃焼しているかどうか考えてほしい。そこから工夫と



高齢化する農業従事者。耕作放棄地対策として、農地中間管理事業に期待が高まる(つづき)



バジルの加工で6次産業化を軌道にのせた実績は県内外から注目を浴びている(つづき)

兵庫県知事・井戸敏三氏 初年度 予測上回る好成績

農地中間管理機構が発足して1年がたった。農地を貸してもよいという「出し手」から機構が借り受け、その農地を借りたという「担い手」に貸し付けした実績は、既に400畝に達し、田植えが始まる6月までには1200畝になる予定だ。当初は「受け手」のニーズはなかなかあるだろうと予測する一方で「出し手」がどれだけの不安だったか、1200畝という数字は初年度としては好成績だったと評価している。

兵庫県は大都市に近く、農業の立地としては恵まれた環境にある。これからは野菜や果樹の生産も増えるだろう。ぜひ、消費者も県内産の野菜・果物を食べてほしい。県ではそのような元気な農業者を支援するため、新年度から温室や農業機械などの設備貸与制度(リース)を始め、そこに県が一定割合を助成することにした。こうした制度を活用しながら、多角的な視野で農業経営に専念してほしい。県も皆さんと一緒に「力強い兵庫農業」を展開できるように努力していく。



神戸で「県農地中間管理事業推進シンポ」

地域の未来育てる

八木氏 地域の農業、農地を守る

姫野 ささ宮農は県内初の集落営農型農業法人として2006年に設立された。どのようなきっかけで法人設立に至ったのか。

八木 私たちの地域はもともと100%第2種兼業農家だった。農業者の高齢化、後継者不足が進む中で、地域の農業、農地を先々どのように守っていけばよいかを話し合い、次の担い手を育てるために営農組合を設立した。その後も話し合いを重ねる中で「所有と経営を分離させてしっかり経営をしていこう」と株式会社化を決めた。

姫野 夢前夢工房は地域の企業とも連携しながら農業の6次産業化の推進、農業と地域の活性化に取り組んでいる。衣笠 私は33歳の時、担保ゼロ、貯金ゼロで親の農地だけを預かってから、農地、地域のあり方を考えるようになった。現在では、コシヒカリやヒノヒカリ、もち米、古代米など約20品種を栽培している。地域企業と連携し、大豆、ソバの加工品の開発を行っている。将来の農家を育て

衣笠氏 次の世代の担い手育成

吉川 当社には単に米を売るだけでなく、いってペーストを作る神戸かに市場を作っていくの食品会社が、バジカを考えている。農業者の高齢化、農業就業人口の減少を見て危機感を抱き、自ら農業に参加しようと考えた。2013年、三田市の十倉集落で組合など「農山村の連携活動には一切使わない」との条に関する協定を締結し、件で、苦労はあったが任されるようになり、神戸市北区に「こり、生産量が増えてうべファーム」を設立いき、1次加工もで「顔の見えるお米」きないかとの依頼が舞として周辺のイオングい込んできた。そこで、ループ各店舗で販売し6次産業化の制度を利

八木 バジルを使っ衣笠 よその村へ行く人、最初はよそ者として扱われる。水を勝手に話をするだけでなく、通常の活動とは別に、何か事業に結び付けられるようなことから始めている。地域で作ったものを神明の販売ルートに乗せることで、地域に貢献できると思っている。こうべファームは農地中間管理機構を利用して農地を次世代につなぐ

吉川 われわれが本気で農業に関わっているというのを地域の人が理解してもらわなければいけない。会って話をするだけでなく、通常の活動とは別に、何か事業に結び付けられるようなことから始めている。地域で作ったものを神明の販売ルートに乗せることで、地域に貢献できると思っている。こうべファームは農地中間管理機構を利用して農地を次世代につなぐ

吉川氏 生産物に付加価値を



八木正邦氏



衣笠愛之氏

「未来につながる あなたの農地」

姫野 みどり公社は兵庫県の農地中間管理5000畝の貸し付けを目標にしている。取組みの現状はどうか。

三浦 現在528経営体から1万畝を超えている。姫野 山の多い兵庫の希望を寄せてもらっている。このうち今年6月までに合計1200農地中間管理事業を進めたい。0畝は、中間管理権の取得から担い手の貸し付けまでできると考え

姫野 山が多い兵庫の希望を寄せてもらっている。このうち今年6月までに合計1200農地中間管理事業を進めたい。0畝は、中間管理権の取得から担い手の貸し付けまでできると考え

三浦 現在528経営体から1万畝を超えている。姫野 山の多い兵庫の希望を寄せてもらっている。このうち今年6月までに合計1200農地中間管理事業を進めたい。0畝は、中間管理権の取得から担い手の貸し付けまでできると考え

パネルディスカッション出席者

- 【パネリスト】
 - 「ささ宮農」代表取締役 八木 正邦氏
 - 「夢前夢工房」代表取締役 衣笠 愛之氏
 - 「神明ホールディング」専務取締役 吉川 和男氏
- 兵庫みどり公社副理事長（農地中間管理事業担当） 三浦 恒夫氏
- 【コーディネーター】
 - 兵庫県農政環境部農政企画局農業経営課長 姫野 崇範氏
 - 【アドバイザー】
 - 全国農地保有合理化協会会長 渡辺 好明氏



吉川和男氏



三浦恒夫氏



姫野崇範氏

三浦氏 確かな第一歩を踏み出せた 渡辺氏 地域に応じた「つなぎ方」を

衣笠 地域の人々にアンケートを行い、まず「あなたの家は10年後に空き家になっている可能性ありますか」と尋ねてから「空き家はどうかされますか」「農地はどうされますか」と踏み込んでいった。そして、若い研修生たちには空き家になった家を借りてもらい、農業や県が作った施策を地域段階の寸法に切り直し、自分たちの地域社会にとって有効なものにし、かつ地域社会が発展していくきっかけにするという視点が重要だ。

三浦 地域の農業、農村の未来を作っていくためには、私どもにも声をかけてもらいたいし、私どもができないけれど、私どもの知り合いにやってもらえないかと声をかけていくような形を作りたい。

三浦 地域の農業、農村の未来を作っていくためには、私どもにも声をかけてもらいたいし、私どもができないけれど、私どもの知り合いにやってもらえないかと声をかけていくような形を作りたい。



渡辺好明氏



熱心に耳を傾ける参加者ら